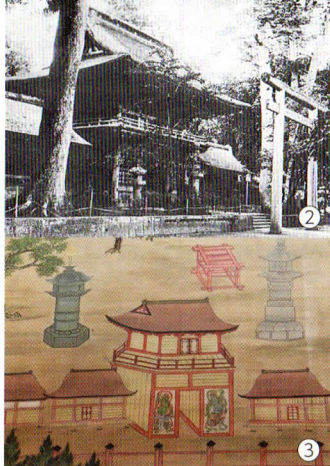


香取遺産

◀①香取神宮楼門 ②大正10年頃の楼門とノ鳥居 ③古絵図に描かれた楼門

朱が鮮やかな
香取神宮楼門

vol.174



香取神宮の楼門は、元禄13(1700)年、幕府により造営されたもので、現在は本殿とともに重要文化財となっています。緑に囲まれる中で、鮮やかな朱色の姿は壮麗であり、奥に見える黒色の社殿と見事なコントラストをなしています。

二階建て、入母屋造、平入の建物で、柱間が3つ、中央に扉がついた出入口のある、いわゆる三間一戸の楼門です。全体に丹塗りが施され、上層と下層の間には、高欄付きの廻廊を巡らせています。香取神宮に残る元禄13年造営時の棟札には「京間・桁行四間、梁間二間一尺一寸二分」とその規模が記されています。屋根は銅板葺ですが、これは昭和15年の修理で葺き直したもので、かつては桧葺(板葺)であったようです。

また、正面「香取神宮」の掲額は、日露戦争で連合艦隊を率いた東郷平八郎が揮毫したものです。

楼門には2体の随身像が安置されていますが、正面向って右は武内宿禰、左は藤原鎌足と伝われます。隨身裏手の木彫りの狛犬は、昭和9年に寄贈されたもので、香取神宮の杉で作られました。江戸時代後期に書かれた小林重規の「香取志」などによれば、古くは八龍神が楼上に安置されていたようです。境内を鎮護する役割を担っていたのでしょうか。また、元禄造営時にかつての境内の様子を描いた古絵図には、左右に仁王像が控えた楼門を見ることができます。

以前は、その楼門前に鳥居が建てられていました。香取神宮の一ノ鳥居とされ、そこから西の方向に伸びていた旧参道への石段の先に、二ノ鳥居が続いていました。

新年の初詣は混雑を避け、ゆっくりと建物見学も兼ねて参拝してはいかがでしょうか。